

栃木県不登校総合対策の方向性について

令和7(2025)年3月13日 教育政策課

1 目 的

不登校児童生徒数が大幅に増加する中、誰一人取り残されない学びの保障に向け、有識者からの意見や不登校に関する調査（対象：児童生徒・保護者・教員）を踏まえ、今後の不登校総合対策の方向性を示したものである。

2 検討の経緯

(1)不登校総合対策検討委員会

学識経験者やフリースクール関係者、スクールカウンセラー等の専門家、保護者、学校関係者等を構成員とする委員会を立ち上げ、不登校に関する調査結果や医療関係者からの聴取を踏まえ、年5回にわたり今後の不登校対策の方向性について内容の検討を行った。

(2)不登校に関する調査結果

- ア 児童生徒の意識調査 小6・中2・高2の全公立学校の生徒、約4万人を対象に調査 (回答数：30,797人)
- イ 保護者のニーズ調査 欠席傾向の子どもを抱える保護者を対象にウェブ調査 (回答数：1,966人)
- ウ 教員対象調査 教員研修の機会を活用して実施したアンケート調査 (回答数：1,033人)
- ※ 調査結果の概要は3ページ以降を参照

3 今後の方向性

	現 状	方 向 性
未 然 防 止	- 欠席の契機は、友達関係が多く、保護者・教員は学校やクラスの雰囲気を挙げる者も多かった。 - また、保護者は先生との関係、教員は子どもの生活リズムの乱れを挙げる者も多い。 - 欠席意向の減少に向け「安心して話せる友達がいること」を挙げる者が多い。 - 保護者は「悩みを聞いて子どもを理解する」ことを求める割合が高い	(1) 全ての児童生徒にとって居心地のよい学校・学級の雰囲気づくり ① 学校風土の見える化 ② 友達関係づくりに向けた取組の充実 ③ 安心して学び、意欲的に取り組む授業づくり (2) 教員と児童生徒・保護者の日常的な信頼関係づくり ① 教員の日常的な指導の改善 ② 保護者に寄り添い思いに応える支援体制の整備と教員の資質向上 ③ 複数の教員で子どもや保護者を支援できる体制づくり ④ 子ども・保護者と向き合う時間の確保

	現 状	方 向 性
初 期 対 応	- 欠席した子どもの半分は誰にも相談していない。 - 相手の反応が不安で相談しなかった割合が高い。 - 相談相手のほとんどは家族で、担任、友人も多い。 - 実際に欠席した児童生徒は「身体の不調のこと」を理由とする割合が高い。 - 不登校の要因等が多様化し、状況に応じた支援策を、素早く見極めることが困難である。	(1) 児童生徒のわずかな変化に気付く力の向上 ① 医学・福祉的な知見による初動段階での対応力の向上 ② アプリ等を活用した早期に気づける環境整備 ③ 子どもの悩み等に対応できる保護者等の学びの充実 ④ 子ども等と継続的に時間を確保し対話できる教員の意識向上 (2) 気付きを他教員や関係機関等に迅速につなぐ体制づくり ① 教員による丁寧かつ多面的な状況把握と気付きの共有 ② SC・SSWを積極活用した組織的アセスメント ③ 学校や医療・福祉関係者等による支援体制づくり ④ SC等の専門家の役割等の理解促進や配置方法の検討
不 登 校 へ の 支 援	- 支援機関を利用せず、「自宅のみ」で過ごしていた児童生徒は半数近い。 - 支援機関を利用しないのは「必要性を感じず」「子どもが家から出られない」「知らなかった」の割合が高い。 - 学校との相談や欠席連絡等に対する個別対応が、保護者の気持ちの回復や安定につながっている。	(1) 社会的自立に向け、学校以外の多様な学びの場を県全体で理解し、その活用を図る仕組みづくり ① 個々に即した多様な学びの場の整備と相互連携の強化 ② 学校や支援関係者が課題等を協議する場の創設（県域・地域） ③ 多様な学びの場や居場所等の特長や有効性の周知 (2) 子どもの不登校に悩む保護者等への適切な支援 ① 保護者に寄り添える学校の組織的な相談体制づくり ② 学校以外の相談窓口等に係る家庭との情報共有化 ③ 保護者を孤立させない地域でのつながりづくり
【留意事項】		
(1) 教員の資質向上 ① 不登校経験者や保護者との対話等を通して理解を深める。 ② 事例検討やロールプレイングなど研修方法を工夫する。 ③ SC等を活用したOJT等により教員の専門性を向上させる。 ④ 研修内容等は学校における働き方改革の観点にも配慮する。		(2) 幅広い関係機関どうしの連携強化 ① 保護者の離職など副次的な課題を、関係機関と共有・協議する。 ② 就学前の状況等を関係機関と情報共有し、就学後に生かす。 ③ 家庭教育等に取り組む関係機関と連携して、未就学段階からの子どもをとりまく良好な環境づくりを促進する。

不登校に関する調査結果(概要)について

令和7(2025)年3月13日 教育政策課

1 調査目的

不登校の未然防止や初期対応、不登校児童生徒への支援に関する取組の充実に資する。

2 調査対象及び回答状況

調査対象		回答者数(人)	回答率(%)
児童生徒	公立小6、中2、高2	30,797	73.2
保護者	小・中・高・特	1,966	—
教員	校長・教頭・主幹教諭、教諭 ※	1,033	39.1

※ 総教センター研修等を実施した際に受講者を対象に実施

3 調査結果概要

(1) 未然防止

○ 欠席のきっかけ

(%)

		小学校	中学校	高校	特別支援学校	備 考
児童生徒調査	友達との関係	35.7	36.8	27.9		欠席したいと思ったきっかけ
	クラスの雰囲気	18.0	18.5	16.3		
	教員との関係	15.0	14.4	9.5		
保護者調査	友達との関係	30.3	38.1	33.8	25.9	欠席日数が1か月以上のみ
	クラスの雰囲気	42.4	45.7	40.5	29.6	
	教員との関係	48.5	34.0	29.9	40.7	
教員調査	友達との人間関係	42.1	51.7	62.7	14.1	休むようになった(休みがちになっている)きっかけとして特に多いと感じるもの(3つまで)
	学校やクラスの雰囲気	14.7	26.1	29.2	14.1	
	教員との関係	9.6	7.7	4.3	10.9	
	勉強	22.6	33.0	17.8	9.4	
	生活リズムの乱れ	42.4	39.8	27.0	42.2	

○ 欠席したい気持ちを減らせる要因と欠席しなかった理由(%) (※欠席したいと思ったことがある児童生徒の回答)

			小学校	中学校	高校
児 童 生 徒 調 査	欠席したい気持ちを減らせる要因 ※ 欠席ありの児童生徒	安心して話せる友達がいる	58.5	55.4	43.4
		安心して話せる担任がいる	33.1	25.0	12.5
		クラスとは違う過ごせる場所	24.8	26.2	17.1
	欠席しなかった理由 ※ 欠席なしの児童生徒	学校に行かなければならない	39.5	50.2	56.3
		安心して話せる友達がいる	37.5	33.9	21.2

(2) 初期対応

○ 相談に関すること(%) (欠席したいと思い、実際に欠席したことがある児童生徒の回答)

			小学校	中学校	高校
児 童 生 徒 調 査	欠席したいと思った時、誰にも相談しなかった		36.2	45.1	48.4
	相談した相手	家族	89.7	88.4	79.4
		担任	25.4	27.2	20.3
		友人	24.8	33.5	40.9
	相談しなかった理由	相手の反応が不安	40.0	35.7	25.0
		相手に迷惑をかけると思った	40.0	36.4	22.3
		どう話したら良いかわからない	41.1	37.3	26.2

○ 欠席のきっかけ(%) (※児童生徒調査は、欠席したいと思ったきっかけ)

			小学校	中学校	高校	特別支援学校
児 童 生 徒 調 査	身体の不調	欠席意向あるが欠席なし	12.9	14.8	15.9	
		欠席あり	27.1	34.9	33.9	
保 護 者 調 査	身体の不調	欠席1か月未満	40.9	40.0	44.8	38.3
		欠席1か月以上	31.1	35.4	41.6	33.3

(3) 支援

○ 児童生徒が支援機関を利用した割合(%) (欠席日数の合計が1か月以上のみ)

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保 護 者 調 査	自宅のみ	40.2	49.5	56.9	37.0
	校内の別室	27.3	33.3	17.4	7.4
	市町教育支援センター	50.8	44.3	14.8	3.7
	フリースクール等	37.1	20.3	2.3	11.1

○ 利用しなかった理由(%) (欠席日数の合計が1か月以上のみ)

			小学校	中学校	高校	特別支援学校
保 護 者 調 査	別室	利用できることを知らなかった	9.1	11.3	22.6	25.9
		知っていたが利用しなかった	15.2	36.1	20.8	18.5
		必要性を感じなかった	52.2	33.0	49.7	50.0
		子どもが家から出られなかった	47.8	31.3	15.0	7.1
	教育支援 センター	利用できることを知らなかった	12.9	18.2	51.7	48.1
		知っていたが利用しなかった	36.4	35.7	31.9	48.1
		必要性を感じなかった	47.3	43.7	44.5	25.0
		子どもが家から出られなかった	21.8	22.2	9.8	13.9
	フリース クール等	利用できることを知らなかった	8.3	13.4	50.9	51.9
		知っていたが利用しなかった	53.8	64.9	43.6	29.6
		必要性を感じなかった	36.7	38.2	40.6	25.0
		子どもが家から出られなかった	22.8	20.5	11.0	21.4

○ 保護者の気持ちの回復や安定につながった支援(%) (欠席日数の合計が1か月以上のみ)

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保 護 者 調 査	家族の理解や協力	45.5	36.1	28.3	29.6
	教員との電話相談や面談	25.0	27.1	35.6	25.9
	スクールカウンセラーへの相談	18.2	18.2	14.5	11.1
	スクールソーシャルワーカーへの相談	7.6	5.5	0.5	3.7
	教育支援センターでの相談	15.9	21.3	4.7	3.7
	フリースクール職員への相談	26.5	14.8	2.9	4.3
	不登校の親の会での相談	28.0	21.3	5.5	3.7
	医療機関への相談	34.8	27.5	27.5	40.7
	出欠連絡の方法等についての学校との相談	31.1	26.8	10.4	3.7

※ 調査結果報告書、3月13日午後に HP に掲載予定

栃木県不登校総合対策の方向性

令和 7 年 3 月
栃木県教育委員会

1 未然防止

現状分析

① 欠席したいと思ったきっかけは、児童生徒調査では友達との人間関係が3割前後、クラスの雰囲気・先生との関係・勉強等が1～2割程度。

保護者調査では、クラスの雰囲気・先生との関係が3～4割程度で、児童生徒調査より高い。

② 欠席したい気持ちを減らすための要因は、「安心して話せる友達がいること」が全校種で高い。小中学校では「安心して話せる担任がいること」も高い。

③ 欠席した児童生徒ほど学校生活への安心感が低い。

④ 保護者が学校や教員に期待することとして、全校種で「悩みをじっくり聞いて子どもを理解する」の割合が高い。

1 未然防止

今後の取組の方向性

(1) 全ての児童生徒にとって居心地のよい学校・学級の雰囲気づくり

- ① 一人一台端末の活用等による学校風土の見える化（※）
- ② 安心できる友達関係づくりに向けた取組の充実
- ③ 全ての児童生徒が安心して学び、意欲的に取り組む授業づくり

(2) 教員と児童生徒・保護者の日常的な信頼関係づくり

- ① 教員の児童生徒への声かけなど、日常的な指導に関する改善
- ② 保護者に寄り添い、その願いや思いに応えるための支援体制の整備と教員の資質向上
- ③ チーム担任制など、複数の教員で児童生徒・保護者をサポートできる体制づくり
- ④ 業務改善等、働き方改革を通じた教員が児童生徒・保護者と向き合う時間を確保
- ⑤ 児童生徒が教員と話しやすいと思える関係づくり

※「学校風土の見える化」とは…学校の風土と欠席日数に関連があることから、学校の風土をツールを使って共有化を図ることにより、学校を安心して学べる場所にするための取組。

2 初期対応

現状分析

① 欠席した児童生徒の半分は誰にも相談していない。欠席意向のある児童生徒は、欠席意向なしの児童生徒に比べて「誰にも相談しない」割合が高く、2割前後存在する。相手の反応が不安で相談しなかった割合が高い。

② 相談相手のほとんどは家族で、担任、友人も多い。

③ 実際に欠席した児童生徒は、欠席しなかった児童生徒に比べて「身体の不調」を認識している割合が高い。

④ 不登校の要因等が多様化し、「待つ方がいい」「積極的なアプローチが必要」など、状況に応じた支援策を、素早く見極めることに難しさがある。

(1) 児童生徒のわずかな変化に気付く力の向上

- ① 教員が医学又は福祉的な知見をもって初動段階で対応できるよう、研修の充実
- ② 心の健康観察アプリ等の活用など、学校・教員がいち早く変化に気づくための環境整備を検討
- ③ 子どもの悩みや変化に適切に対応できるよう、保護者等の学びの機会の充実
- ④ 気がかりな児童生徒・保護者と、時間をとって継続的に話をしようとする、教員の意識向上

(2) 気付きを他の教員や関係機関等に迅速につなぐことのできる体制づくり

- ① 教員による児童生徒に関する丁寧かつ多面的な状況等の把握と、校内における気付きの共有
- ② SC・SSWも積極活用した組織的なアセスメント(分析・評価)の実施
- ③ 学校やSC、SSW、医療・福祉関係者等の連携による、適切な支援につなげる体制づくり
- ④ SCやSSWの役割等の理解促進や、相談ニーズに対応できる配置方法の検討

3 不登校児童生徒への支援

現 状 分 析

- 
- ① 支援機関を利用せず、「自宅のみ」で過ごしていた児童生徒は4～5割程度で、学校段階が上がるにつれ割合が高くなる。利用しない理由は、「必要性を感じなかった」「子どもが家から出られない」「利用できることを知らなかった」の割合が高い。
 - ② 市町教育支援センターでは、利用者の増加により、現在の施設や人員、支援体制での対応が困難になってきている。市町教育支援センターでは送迎が、フリースクールでは送迎と利用料が保護者の負担となっている。
 - ③ 不登校の多様な状況に応じたきめ細かな支援を行うため、教育委員会や学校、関係機関、民間支援団体等が連携し、相互に協力・補完し合うことが求められている。
 - ④ 学校の教員との電話での相談や学校での面談、欠席連絡等に対する個別対応が、保護者の気持ちの回復や安定につながっている。

3 不登校児童生徒への支援

今後の取組の方向性

(1) 社会的自立に向け、学校以外の多様な学びの場を県全体で理解し、その活用を図る仕組みづくり

- ① 教室や学校以外の場で過ごすことを希望する子、登校や支援センター等への通所を希望しない子、多くの時間を家庭で過ごしている子等、個々の状況にあった多様な学びの場の整備と相互連携の強化
 - ア 不登校児童生徒を官民間問わず多様な学びの場につなぐ県全体の仕組みづくり
 - イ フリースクール等の出席認定や関係機関との個人情報取り扱い等、連携に係る諸課題の整理
 - ウ 市町教育支援センターやフリースクール等の利用者増加やニーズの多様化への対応
 - エ 安心して生活・学習できる環境が整った校内教育支援センターの設置促進
 - オ 多くの時間を家庭で過ごしている子への、オンラインやアウトリーチ型の支援の検討

- ② 学校や様々な不登校支援関係者(※)間が、課題等を協議する場の創設(県全域・地域単位等)

- ③ 多様な学びの場や居場所等のそれぞれの特長や有効性の周知

(2) 子どもの不登校に悩む保護者等への適切な支援

- ① 保護者の願いや思いに寄り添える学校の組織的な相談体制づくり
- ② 学校以外の相談窓口等について、学校と家庭との間で情報の共有化
- ③ 保護者を孤立させないための地域でのつながりづくり

※ 不登校支援関係者…学校関係の外部人材(SC・SSW)、校内外の教育支援センター、フリースクール・親の会・居場所等の民間機関(団体)行政(子ども政策関係等)・福祉・医療の関係者等

4 留意事項

今後、3つの方向性に基づき県の施策を具現化するにあたっては、以下の点に留意して具体策を検討する。

(1) 教員の資質向上

- ① 不登校の経験者や保護者との対話等を通して、不登校児童生徒やその家族への理解を深める。
- ② 事例検討やロールプレイングの導入など、より効果的な研修方法を工夫する。
- ③ SCやSSWを活用しながらの日常的な教育活動を通したより実践的な学び(OJT)により、教員の専門性を向上させる。
- ④ 研修内容や方法等を検討する際には、学校における働き方改革の観点にも配慮する。

(2) 幅広い関係機関どうしの連携強化

- ① 保護者の離職や社会的孤立など不登校から派生する副次的な課題を、関係機関と共有し、対策について協議する。
- ② 就学前の子どもの状況等について関係機関との情報共有を充実させ、就学後の対策に生かす。
- ③ 家庭教育等に取り組む関係機関と連携して、未就学段階からの子どもをとりまく良好な環境づくりを促進する。

「不登校に関する調査結果」

報告書

令和 7 年 2 月

栃木県教育委員会

目次

第1章 調査概要.....	1
1-1 調査目的	1
1-2 調査概要	1
1-2-1 児童生徒調査.....	1
1-2-2 保護者調査.....	2
1-2-3 教員調査.....	3
第2章 調査結果.....	4
2-1 児童生徒調査	4
2-1-1 欠席状況.....	4
2-1-2 欠席のきっかけ.....	4
2-1-3 学校を休んだ時の気持ち.....	6
2-1-4 相談状況.....	7
2-2 保護者調査	8
2-2-1 欠席のきっかけ・子どもの様子.....	8
2-2-2 学習状況、学校内外の施設の利用状況、スクールカウンセラーへの相談状況 ..	9
2-2-3 子どもが学校を休んでいる間の保護者の気持ち.....	10
2-2-4 保護者の気持ちの回復や安定につながった支援.....	10
2-2-5 学校や先生に期待すること.....	11
2-3 教員調査	12
2-3-1 欠席のきっかけ.....	12
2-3-2 児童生徒が相談しやすい環境づくりに関する課題.....	12
2-3-3 不登校（傾向も含む）児童生徒や保護者と直接関わって感じた課題.....	13
2-3-4 スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用に関する課題	14
2-3-5 不登校児童生徒及び保護者の対応における関係機関等との連携の実施.....	15
2-3-6 民間の支援機関や福祉の関係機関との連携に関する課題.....	15
2-4 まとめ	16
2-4-1 未然防止.....	16
2-4-2 初期対応.....	19
2-4-3 不登校児童生徒への支援.....	20

第1章 調査概要

1-1 調査目的

栃木県の不登校児童生徒数は、小・中学校、高校（全日制）では令和4（2022）年度において、過去10年で最多となっており、未然防止・初期対応・支援の視点からの取組の充実が必要である。このため、不登校の未然防止や初期対応、不登校児童生徒への支援に関する取組の充実に生かすことを目的に、アンケートを実施した。

1-2 調査概要

1-2-1 児童生徒調査

（1）調査対象

県内全ての公立小学校6年生 15,593 人、公立中学校2年生 15,827 人、県立高校全日制課程2年生 10,666 人、計約4万人

（2）調査方法

1人1台端末等によるweb回答

（3）調査時期

令和6（2024）年7月8日（月）～8月20日（火）

（4）回収数

小学校 12,381 人、中学校 11,436 人、高校 6,980 人

※【欠席傾向について】

本資料の一部では、欠席傾向別の集計を行っている。分類方法は、下記の通り。

欠席あり	□ 病気やけが以外（気がかりなことがあった場合など）の理由で、学校を欠席したいと思ったことがあるか。⇒「よくある」「ときどきある」と回答。 □ 病気やけが以外（気がかりなことがあった場合など）の理由で「欠席したい」と思ったとき、実際に学校を欠席したか。⇒「いつも欠席していた」「ときどき欠席することがあった」と回答
欠席意向あるが欠席なし	□ 病気やけが以外（気がかりなことがあった場合など）の理由で、学校を欠席したいと思ったことがあるか。⇒「よくある」「ときどきある」と回答。 □ 病気やけが以外（気がかりなことがあった場合など）の理由で「欠席したい」と思ったとき、実際に学校を欠席したか。⇒「ほとんど欠席することはなかった」「欠席することはなかった」と回答
欠席意向なし	□ 病気やけが以外（気がかりなことがあった場合など）の理由で、学校を欠席したいと思ったことがあるか。⇒「あまりない」「全くない」と回答。

1-2-2 保護者調査

(1)調査対象

県内の小学校、中学校、義務教育学校、高校、特別支援学校に在籍している欠席の多い児童生徒の保護者

(2)調査方法

Web 回答

(3)調査時期

令和 6（2024）年 9 月 4 日（水）～ 9 月 30 日（月）

(4)回収数

小学校 155 人、中学校 348 人、高校 1,369 人、特別支援学校 94 人

※小学校には義務教育学校（前期課程）を含む。中学校には義務教育学校（後期課程）を含む。

1-2-3 教員調査

(1) 調査対象

令和6年度における下記研修等の受講者

主催者	対象者職名	研修名	受講者数
栃木県総合教育センター	教諭	初任者研修、2年目研修、3年目研修、5年目研修、中堅教諭等資質向上研修	2,010名
	養護教諭	新規採用研修、5年目研修、中堅研修	60名
	教頭	新任教頭研修、2年目研修	328名
宇都宮市教育委員会	主幹教諭・教諭	中堅教諭等資質向上研修、教職20年目研修、キャリアマネジメント研修、宮・リーダー研修	154名
高校教育課	教諭	令和6年度県立学校生徒指導連絡協議会	86名
計			2,638名

(2) 調査方法

Web回答

(3) 調査時期

令和6（2024）年11月～令和7（2025）年2月

(4) 回収数 1,033人

小学校 523人、中学校 261人、高等学校 185人、特別支援学校 64人

※小学校には義務教育学校（前期課程）を含む。中学校には義務教育学校（後期課程）を含む。

職種	小学校	中学校	高校	特別支援学校	合計
教諭	375	193	147	54	769
養護教諭	25	9	3	2	39
主幹教諭	1	2	1	0	4
教頭・副校長	122	57	34	8	221
合計	523	261	185	64	1,033

教職年数	小学校	中学校	高校	特別支援学校	合計
1～2年	86	39	25	10	160
3～5年	198	101	75	27	401
6～10年	69	43	25	10	147
11～20年	34	9	16	6	65
21～30年	44	29	20	4	97
31年以上	92	40	24	7	163
合計	523	261	185	64	1,033

第2章 調査結果

2-1 児童生徒調査

2-1-1 欠席状況

欠席状況（％）

		小学校	中学校	高校
欠席意向の有無	よくある	5.5	7.6	10.5
	ときどきある	17.3	20.5	27.2
	あまりない	34.3	33.8	30.9
	全くない	42.6	38.0	31.1
実際の欠席状況	いつも欠席していた	3.8	4.9	3.2
	ときどき欠席することがあった	23.6	25.8	23.2
	ほとんど欠席することはなかった	22.8	21.5	21.6
	欠席することはなかった	47.8	47.1	50.8

・小学校では、欠席したいと思ったことがある児童が 22.8％、うち実際に休んだのが 27.4％（全体の 6.2％）。

・中学校では、欠席したいと思ったことがある生徒が 28.1％、うち実際に休んだのが 30.7％（全体の 8.6％）。

・高校では、欠席したいと思ったことがある生徒が 37.7％、うち実際に休んだのが 26.4％（全体の 10.0％）。

⇒学校段階が上がるほど、欠席したいと思う児童生徒、実際に休む児童生徒の割合が高くなり、高校段階では 1 割程度が病気やけが以外の理由で欠席している。

2-1-2 欠席のきっかけ

欠席のきっかけ（％）

		小学校	中学校	高校
友達との人間関係のこと	全体	35.7	36.8	27.9
	欠席あり	37.2	40.0	33.5
	欠席意向あるが欠席なし	35.5	35.4	26.0
生活リズムのこと	全体	17.2	22.1	27.2
	欠席あり	19.8	27.7	32.0
	欠席意向あるが欠席なし	16.4	19.7	25.7
勉強のこと	全体	19.8	26.7	26.3
	欠席あり	19.1	28.5	27.4
	欠席意向あるが欠席なし	20.5	26.0	25.8
身体の不調のこと	全体	16.8	21.0	20.7
	欠席あり	27.1	34.9	33.9
	欠席意向あるが欠席なし	12.9	14.8	15.9

欠席したい気持ちを減らせる要因（％）

	小学校	中学校	高校
学校に行かなければいけないと思ったから	39.5	50.2	56.3
学校の中に安心して話せる友達がいたから	37.5	33.9	21.2
勉強がわからなくなることが心配だったから	25.2	32.8	36.0

欠席したいと思ったが欠席しなかった理由 (%)

	小学校	中学校	高校
学校に行かなければいけないと思ったから	39.5	50.2	56.3
学校の中に安心して話せる友達がいたから	37.5	33.9	21.2
勉強がわからなくなることが心配だったから	25.2	32.8	36.0

現在悩んでいること (%)

		小学校	中学校	高校
友達との人間関係のこと	欠席あり	45.9	38.0	31.2
	欠席意向あるが欠席なし	42.7	36.6	25.9
	欠席意向なし	15.8	13.2	11.0
勉強のこと	欠席あり	28.0	47.2	37.6
	欠席意向あるが欠席なし	26.9	40.8	44.4
	欠席意向なし	18.8	35.4	38.1
将来のこと	欠席あり	24.2	42.9	46.0
	欠席意向あるが欠席なし	24.7	35.6	51.8
	欠席意向なし	20.7	31.5	45.8

- ・欠席したいと思ったきっかけは「友達との人間関係のこと」の割合が高い。
- ・高校では、「生活リズムのこと」「勉強のこと」などの割合も高い。また、実際に欠席した児童生徒では「身体の不調のこと」の割合が高い（欠席したい気持ちが、身体の不調をきっかけに実際の欠席につながる）。
- ・学校を欠席した児童生徒が、どのようなことがあれば学校を欠席したい気持ちを減らせたかについては、「学校の中に一緒にいて安心できる友達がいること」の割合が高い。
- ・欠席したいと思ったが欠席しなかった理由は、「学校に行かなければいけないと思ったから」の割合が高い。小中学校では「学校の中に安心して話せる友達がいたから」の割合も高い。中学・高校では「勉強がわからなくなることが心配だったから」の割合も高い。
- ・欠席傾向別に現在悩んでいることをみると、欠席あり・欠席意向あるが欠席なしの児童生徒は、欠席意向なしの児童生徒と比べて「友達との人間関係のこと」に悩んでいる割合が高い。
- ・中学校では欠席ありの生徒が、高校では欠席意向あるが欠席なしの生徒が、「勉強のこと」「将来のこと」に悩んでいる割合が高い。

⇒欠席したいと思う要因として「友達」の存在は大きく、実際の欠席を踏みとどまらせていることもあるとみられる。中学・高校では「勉強」も欠席を踏みとどまった要因になっている。一方で、欠席したい気持ちが実際の欠席になる要因として「身体的な不調」も影響が大きいと思われる。

2-1-3 学校を休んだ時の気持ち

学校を休んだ時の気持ち（「あてはまる」・「どちらかといえばあてはまる」の計）（％）

	小学校	中学校	高校
ほっとした・気持ちが楽になった	81.9	79.6	77.7
自由な時間が増えてうれしかった	72.2	72.6	78.7
勉強が遅れてしまうので心配だった	60.9	65.5	62.3
自分がよくないことをしているように感じた	55.6	61.1	57.3
家族に心配をかけて辛い気持ちだった	46.9	51.9	42.2

現在の学校生活（％）

		小学校	中学校	高校
学校で安心して過ごすことができる	欠席あり	61.6	56.1	62.8
	欠席意向あるが欠席なし	76.4	75.4	75.7
	欠席意向なし	95.4	95.6	94.5
学校が楽しい	欠席あり	65.6	62.9	64.2
	欠席意向あるが欠席なし	79.2	77.2	78.6
	欠席意向なし	95.8	96.5	94.8
わたしのクラスは、居心地がよい	欠席あり	61.4	62.6	63.4
	欠席意向あるが欠席なし	73.0	74.2	75.0
	欠席意向なし	93.0	93.4	92.0

・学校を休んだ時の気持ちは、「ほっとした・気持ちが楽になった」「自由な時間が増えてうれしかった」の割合が高い。一方、「勉強が遅れてしまうので心配だった」「自分がよくないことをしているように感じた」と考える児童生徒も多い。

・現在の学校生活については、欠席あり、欠席意向あるが欠席なしの児童生徒は、欠席意向なしの児童生徒と比べて「学校で安心して過ごすことができる」「学校が楽しい」「わたしのクラスは、居心地がよい」とは思っていない割合が高い。

⇒欠席した児童生徒は「ほっとした・気持ちが楽になった」割合が多い一方、自分がよくないことをしているように感じた」と考える児童生徒も多い。また、現在、学校で安心して過ごせる、居心地が良いとは思っていない割合が高い。

2-1-4 相談状況

相談した割合と相談相手（欠席あり）（％）

	小学校	中学校	高校
欠席についての相談をした	59.9	52.6	48.9
家族	89.7	84.4	79.4
担任の先生	25.4	27.2	20.3
友達や知り合い	24.8	33.5	40.9

相談しなかった割合とその理由（欠席あり）（％）

	小学校	中学校	高校
欠席についての相談をしなかった	36.2	45.1	48.4
何をどのように話したらよいかわからなかったから	41.1	37.3	26.1
相談した相手に迷惑をかけると思ったから	40.0	36.4	22.3
相談したときの相手の反応が不安だったから	40.0	35.7	24.9
特にない	23.6	29.9	45.1

悩んでいるときに相談したい相手（欠席意向別）（％）

		小学校	中学校	高校
誰にも相談しない	欠席あり	13.6	18.3	20.1
	欠席意向あるが欠席なし	18.3	21.9	18.2
	欠席意向なし	10.5	11.4	8.7

- ・ 学校を欠席した児童生徒が誰かに相談した割合は半数程度。相談した相手は、8～9 割が家族、2～3 割が担任の先生。中学校以上では、友達や知り合いにも 3～4 割が相談している。
- ・ 相談しなかった理由は、小中学校では「何をどのように話したらよいかわからなかったから」「相談した相手に迷惑をかけると思ったから」「相談したときの相手の反応が不安だったから」。高校では、「特にない」の割合が高くなる。
- ・ 欠席傾向別に悩んでいるときに相談したい相手をみると、欠席あり、欠席意向あるが欠席なしの児童生徒は、欠席意向なしの児童生徒と比べて「誰にも相談しない」割合が高く 2 割前後存在する。

⇒欠席した児童生徒は半数近くは家族に相談している。一方で、欠席した生徒の残り半数は相談していない。欠席していない児童生徒の 2 割程度は、悩んだときに「誰とも相談しない」と考えている。

2-2 保護者調査

2-2-1 欠席のきっかけ・子どもの様子

欠席のきっかけ (%)

	小学校	中学校	高校	特別支援学校
先生との関係	45.8	32.2	17.4	24.5
学校やクラスの雰囲気	43.2	42.5	25.2	21.3
1か月未満	45.5	22.0	20.5	19.1
1か月以上	42.4	45.7	40.5	29.6
友達との人間関係	31.6	37.6	27.4	22.3
頭痛や腹痛等の身体の不調	32.3	36.2	41.7	31.9

学校を休んでいる間の子どもの様子 (%)

	小学校	中学校	高校	特別支援学校
心が安定していた	41.9	27.3	21.5	35.1
原因がはっきりしない頭痛、腹痛、 発熱等の身体の不調があった	32.9	37.9	35.3	11.7
1か月未満	36.4	38.0	32.3	6.4
1か月以上	32.6	37.8	46.5	14.8
インターネットやゲームを長時間 していた	39.4	50.9	25.8	20.2
1か月未満	18.2	16.0	19.3	21.3
1か月以上	43.2	56.4	43.6	29.6
落ち込んだり悩んだりしていた	24.5	38.8	25.5	10.6
1か月未満	13.6	24.0	18.4	6.4
1か月以上	26.5	41.2	43.6	18.5
家から出られない、他人との関わり を避ける	29.7	33.0	11.8	12.8
1か月未満	0.0	4.0	4.2	2.1
1か月以上	34.8	38.8	30.4	40.7

- ・子どもが学校を休むようになったきっかけは、小学校は「先生との関係」「学校やクラスの雰囲気」、中学校では「学校やクラスの雰囲気」「友達との人間関係」「頭痛や腹痛等の身体の不調」、高校、特別支援学校では「頭痛や腹痛等の身体の不調」の割合が高い。高校で1か月以上欠席している子どもは、「学校やクラスの雰囲気」の割合も高い。
- ・学校を休んでいる間の子どもの様子は、全校種の1か月以上で「家から出られない」が高い。小学校と特別支援学校では、「心が安定していた」の割合が高い。中学校では欠席期間1か月未満で「原因がはっきりしない頭痛、腹痛、発熱等の身体の不調があった」、1か月以上では「インターネットやゲームを長時間していた」の割合が高い。高校では、「原因がはっきりしない頭痛、腹痛、発熱等の身体の不調があった」の割合が最も高く、1か月以上では「落ち込んだり悩んだりしていた」「インターネットやゲームを長時間していた」の割合も高い。

⇒学校段階が上がるほど、休むようになったきっかけや休んでいる時の様子として「身体の不調」の割合が高くなり、特に高校で顕著となる。

2-2-2 学習状況、学校内外の施設の利用状況、スクールカウンセラーへの相談状況

学校を休んでいる間、自宅学習をしていなかった割合（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
欠席している間 自宅学習なし	全体	60.0	63.2	57.3	79.8
	1か月未満	40.9	56.0	55.8	83.0
	1か月以上	63.6	64.9	70.9	88.9

学校内外の施設の利用状況（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
学校内の別室の利用	全体	27.1	31.0	8.8	9.6
	1か月未満	27.3	20.0	4.9	12.8
	1か月以上	27.3	33.3	17.4	7.4
市町の教育支援センター等の利用	全体	49.0	38.5	6.3	6.4
	1か月未満	36.4	6.0	2.8	10.6
	1か月以上	50.8	44.3	14.8	3.7
民間のフリースクールの利用	全体	34.8	18.1	1.3	6.4
	1か月未満	22.7	8.0	0.8	6.4
	1か月以上	37.1	20.3	2.3	11.1

スクールカウンセラーへの相談状況（％）

	相談した子ども		相談した保護者	
	1か月未満	1か月以上	1か月未満	1か月以上
小学校	22.7	37.9	45.5	68.9
中学校	36.0	42.6	24.0	62.5
高校	17.3	44.2	8.2	40.5
特別支援学校	14.9	11.1	12.8	25.9

- ・自宅学習については、いずれの学校種においても、欠席期間が1か月未満と比べて1か月以上の方が、「学習していなかった」割合が高い。
- ・不登校児童が利用できる学校内外の施設の利用状況は、小中学校と比べて高校、特別支援学校の利用割合が低い。また概して欠席期間が1か月未満と比べて1か月以上の方が、利用割合が高い。
- ・スクールカウンセラーへの相談状況は、いずれの学校種においても、子どもより保護者が相談した割合が高い。また、他の学校種に比べて高校の相談割合が低い。また、欠席期間が1か月未満と比べて1か月以上の方が、相談割合が高い。

⇒欠席期間が長い方が自宅学習はしない一方、学内外の施設やスクールカウンセラーの利用割合は高くなる。

2-2-3 子どもが学校を休んでいる間の保護者の気持ち

子どもが学校を休んでいる間の保護者の気持ち（欠席日数の合計が1か月以上のみ）（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者 調査	進路や将来が不安	68.9	79.4	79.7	66.7
	勉強の遅れが不安	68.9	69.1	53.5	18.5
	いつ学校に戻れるか不安	57.6	54.3	57.1	40.7
	欠席連絡が負担	66.7	68.4	59.0	33.3

- ・子どもが休んでいる間の保護者の気持ちでは、全校種で「進路や将来が不安」が最も高い。
- ・小・中・高校では、「勉強の遅れが不安」「学校に戻れるか不安」「欠席連絡が負担」の割合も高い。

⇒保護者は勉強の遅れや進路選択上のリスクを心配している。

2-2-4 保護者の気持ちの回復や安定につながった支援

保護者の気持ちの回復や安定につながった支援（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
家族や親戚の理解や協力があつたこと	全体	45.8	35.3	26.9	29.8
	1か月未満	45.5	30.0	27.5	31.9
	1か月以上	45.5	36.1	28.3	29.6
学校の先生との電話での相談や学校での面談	全体	27.1	27.6	24.7	28.7
	1か月未満	36.4	30.0	21.4	34.0
	1か月以上	25.0	27.1	35.6	25.9
特にない	全体	10.3	15.8	35.5	30.9
	1か月未満	13.6	32.0	40.6	31.9
	1か月以上	9.8	13.1	21.3	18.5

- ・保護者の気持ちの回復や安定につながった支援についてみると、小中学校では「家族や親戚の理解や協力があつたこと」の割合が高い。
- ・高校では、欠席期間1か月未満は「特にない」、1か月以上では「学校の先生との電話での相談や学校での面談」の割合が高い。
- ・特別支援学校では、「特にない」「家族や親戚の理解や協力があつたこと」「学校の先生との電話での相談や学校での面談」の割合が高い。

⇒身近な家族や親戚の理解や協力や、先生との相談が気持ちの安定につながった保護者がいる一方、安定につながった支援が特にない保護者も一定数いる。

2-2-5 学校や先生に期待すること

学校や先生に期待すること（％）

	小学校	中学校	高校	特別支援学校
全ての学校で別室に登校できるよう、環境を整備してほしい	54.8	28.7	16.3	12.8
1 か月未満	54.5	20.0	11.1	4.3
1 か月以上	55.3	30.2	29.1	29.6
出欠連絡の方法等について、児童生徒や保護者と相談しながら決めてほしい	50.3	38.8	19.1	13.8
1 か月未満	31.8	20.0	13.8	4.3
1 か月以上	53.0	41.6	31.2	33.3
悩みや意見をじっくり聞いて子供の気持ちを分かってほしい	45.8	38.5	27.0	24.5
人間関係の問題やいじめなどのない安心して楽しく生活できる学校にしてほしい	32.9	28.4	26.2	21.3
勉強をわかりやすく（丁寧に）教えてほしい	32.3	24.4	23.4	14.9
子供が友達と仲良くなれるよう手助けしてほしい	23.2	17.0	14.2	21.3
子供が先生と話す時間を作ってほしい	27.7	24.7	18.0	21.3

- ・小学校では、「全ての学校で別室に登校できるよう、環境を整備してほしい」「欠席しがちな状態になった場合に、出欠連絡の方法や家庭訪問の実施の有無、学校からの配布物の配布方法、登校の際の配慮等について、児童生徒や保護者と相談しながら決めてほしい」の割合が高い。
- ・中学校では、「欠席しがちな状態になった場合に、出欠連絡の方法や家庭訪問の実施の有無、学校からの配布物の配布方法、登校の際の配慮等について、児童生徒や保護者と相談しながら決めてほしい」「悩みや意見をじっくり聞いて子供の気持ちを分かってほしい」の割合が高い。
- ・高校では、「悩みや意見をじっくり聞いて子供の気持ちを分かってほしい」「人間関係の問題やいじめなどのない安心して楽しく生活できる学校にしてほしい」「勉強をわかりやすく（丁寧に）教えてほしい」の割合が高い。
- ・1 か月以上では「欠席しがちな状態になった場合に、出欠連絡の方法や家庭訪問の実施の有無、学校からの配布物の配布方法、登校の際の配慮等について、児童生徒や保護者と相談しながら決めてほしい」「全ての学校で別室に登校できるよう、環境を整備してほしい」等の割合も高い。特別支援学校では、「悩みや意見をじっくり聞いて子供の気持ちを分かってほしい」「子供が友達と仲良くなれるよう手助けしてほしい」「子供が先生と話す時間を作ってほしい」の割合が高い。

⇒保護者の学校や先生に期待することとして、全ての学校種で「別室登校環境の整備」「欠席者に対する個別対応」「悩みをじっくり聞いて子どもを理解する」等の割合が高い。

2-3 教員調査

2-3-1 欠席のきっかけ

関わった児童生徒が休むようになった（休みがちになっている）きっかけとして特に多いと感じるもの（3つまで）（％）

	小学校	中学校	高校	特別支援学校
友達との人間関係	42.1	51.7	62.7	14.1
学校やクラスの雰囲気	14.7	26.1	29.2	14.1
先生との関係	9.6	7.7	4.3	10.9
勉強がわからない	22.6	33.0	17.8	9.4
生活リズムの乱れ	42.4	39.8	27.0	42.2

- ・全校種で「生活リズムの乱れ」が3～4割程度おり、学校段階が上がるにつれ低くなる。
- ・小中高では「友達との人間関係」が4～6割程度おり、学校段階が上がるにつれ高くなる。
- ・中高では「学校・クラスの雰囲気」が2割～3割程度と他校種に比べ高く、中では「勉強」が3割程度と他校種に比べ高い。

⇒児童生徒との日常的な信頼関係づくりや、全ての児童生徒が安心して学び、意欲的に取り組む授業づくりも重要。

2-3-2 児童生徒が相談しやすい環境づくりに関する課題

児童生徒が相談しやすい環境づくりに関する課題（％）

	小学校	中学校	高校	特別支援学校
教職員が多忙	49.3	50.2	50.8	39.1
教職員の相談スキル不十分	22.4	24.9	27.6	23.4
相談場所や部屋がない	24.7	21.8	20.5	32.8

- ・全校種で「教職員が多忙」が4～5割程度、「相談スキルが不十分」「相談場所や部屋が少ない」が2～3割程度いる。

⇒児童生徒と向き合う時間や場所の確保、相談スキルの向上に課題を感じている。

2-3-3 不登校（傾向も含む）児童生徒や保護者と直接関わって感じた課題

不登校（傾向も含む）児童生徒や保護者と直接関わって感じた課題（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
児童生徒	性格や精神状態に応じた接し方や信頼関係の構築	46.3	49.8	53.5	43.8
	登校や別室を促すタイミングや程度の判断	35.9	36.4	29.2	20.3
	校内や教室に入ることを拒む子どもへ促す程度の判断	40.2	40.6	33.5	20.3
	保健室や別室利用の許容の程度の判断	39.8	40.2	39.5	17.2
保護者	保護者と連絡をとれる時間が合わない	37.9	51.7	49.2	21.9
	家庭訪問の時間が合わない	33.8	54.0	27.6	15.6
	家庭連絡の頻度や方法が適しているか分からない	36.9	32.6	33.0	23.4
	保護者と子どもの支援ニーズが一致せず対応が難しい	36.3	34.1	33.5	34.4
	保護者の理解と協力を得ることが難しい	25.0	25.3	24.9	26.6

・児童生徒は、全校種で「接し方や信頼関係の構築」が4～5割程度あり、小中高では「教室等に入ることを拒む子どもへ促す程度の判断」「保健室等利用等の許容の程度の判断」が3～4割程度いる。

・保護者は、全校種で「保護者と子どもの希望が一致しておらず対応が難しい」が3割～4割弱、「保護者の理解と協力が得られない」が2割程度あり、中高では「保護者と連絡をとれる時間が合わない」が5割程度と他校種に比べ高い。

⇒医療の知見等も踏まえた児童生徒への対応や、児童生徒の個別状況を踏まえた対応、保護者との信頼関係の構築に課題を感じている。

2-3-4 スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用に関する課題

スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーの活用に関する課題（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
来校日が少ない	S C	40.3	37.5	28.6	14.1
	S S W	24.7	23.8	10.3	10.9
来校日が合わない	S C	22.8	23.8	15.1	17.2
	S S W	15.9	19.9	7.6	10.9
家から出られない子の利用が困難	S C	20.3	30.7	27.0	18.8
	S S W	10.5	13.8	6.5	9.4
本人等に利用の意思がない	S C	33.7	39.1	37.3	15.6
	S S W	19.9	19.9	8.1	7.8
つなぐ場面が分からない	S C	13.4	13.4	4.9	31.3
	S S W	25.6	29.1	32.4	31.3
専門性が分からない	S C	7.5	8.0	6.5	10.9
	S S W	16.1	19.2	23.2	18.8

- ・「来校日が少ない」について、小中でスクールカウンセラーは4割程度、スクールソーシャルワーカー2割程度。
- ・「来校日が合わない」について、スクールカウンセラーは小中で2割程度、スクールソーシャルワーカーは中で2割程度。
- ・「つなぐ場面が分からない」「専門性が分からない」は小中高でスクールソーシャルワーカーよりスクールカウンセラーが低い

⇒スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの来校が少ないことや、スクールソーシャルワーカーにつなぐ場面がわかりにくいことに課題を感じている。

2-3-5 不登校児童生徒及び保護者の対応における関係機関等との連携の実施

不登校児童生徒及び保護者の対応における関係機関等との連携の実施（％）

	小学校	中学校	高校	特別支援学校
スクールカウンセラー	90.8	89.7	89.7	26.6
スクールソーシャルワーカー	58.9	72.8	35.1	39.1
市町の教育支援センター	50.7	59.8	8.6	14.1
市町教育委員会	50.3	49.8	5.4	18.8
市町の福祉機関（保健センター等）	14.5	18.8	6.5	23.4
県の福祉機関 （児童相談所、健康福祉センター等）	17.8	23.8	21.6	28.1
民間の支援機関（フリースクール等）	14.0	22.2	0.5	0.0
医療機関	26.8	28.4	25.9	21.9

- ・小中高で「スクールカウンセラー」が9割程度いる。
- ・中で「スクールソーシャルワーカー」が7割と他校種に比べ高い。
- ・小中で「市町の教育支援センター・市町教育委員会」が5～6割いる。
- ・小中で「市町の福祉機関」が1～2割5分程度、全校種で「県の福祉機関」が2～3割程度いる。
- ・全校種で「医療機関」が2～3割程度いる。

⇒関係機関等との連携が不十分な可能性がある。

2-3-6 民間の支援機関や福祉の関係機関との連携に関する課題

民間の支援機関や福祉の関係機関との連携に関する課題（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
関係機関ごとの機能の違いが分からない	民間	43.0	44.4	52.4	40.6
	福祉	29.4	34.9	36.8	20.3
関係機関との情報共有等に時間がかかる	民間	30.4	31.0	31.9	26.6
	福祉	31.9	37.2	41.6	28.1
関係機関を保護者にどのように紹介したらよいか分からない	民間	34.2	36.0	37.3	32.8
	福祉	31.2	30.3	29.7	26.6
関係機関における個々の児童生徒の学習状況を踏まえた出席扱いの判断が難しい	民間	28.3	41.8	40.5	28.1
	福祉	15.7	25.3	29.2	18.8

- ・「関係機関ごとの機能の違いが分からない」については、民間が4～5割程度、福祉が3割程度。
- ・「関係機関との情報共有等に時間がかかる」は3～4割程度、「保護者にどのように紹介したらよいか分からない」が3割程度いる。
- ・「出席扱いの判断」については、民間、福祉とも中高が他校種に比べ高い。

⇒関係機関との連携や、保護者への情報提供、出席認定の判断に課題を感じている。

2-4 まとめ

2-4-1 未然防止

(1) 欠席のきっかけ

欠席のきっかけ

(※児童生徒調査は、欠席したいと思ったきっかけ。保護者調査は欠席日数が1か月以上のみ、教員調査は休むようになった(休みがちになっている)きっかけとして特に多いと感じるもの(3つまで)(%)

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
児童生徒調査	友達との関係	35.7	36.8	27.9	
	クラスの雰囲気	18.0	18.5	16.3	
	教員との関係	15.0	14.4	9.5	
保護者調査	友達との関係	30.3	38.1	33.8	25.9
	クラスの雰囲気	42.4	45.7	40.5	29.6
	教員との関係	48.5	34.0	29.9	40.7
教員調査	友達との人間関係	42.1	51.7	62.7	14.1
	学校やクラスの雰囲気	14.7	26.1	29.2	14.1
	教員との関係	9.6	7.7	4.3	10.9
	勉強	22.6	33.0	17.8	9.4
	生活リズムの乱れ	42.4	39.8	27.0	42.2

・児童生徒が欠席したいと思ったきっかけは、全校種で友達との人間関係の割合が高い。特に女子は男子より割合が高い。

・休むようになったきっかけについて、保護者の認識は、クラスの雰囲気、教員との関係、友人との関係の割合が高く、教員の認識は、友達との人間関係、生活リズムの乱れ、学校やクラスの雰囲気が高い。

⇒子どもたちにとって友達存在は大きい。クラスの雰囲気、担任の存在も大切。

⇒教員の児童生徒との日常的な信頼関係づくりや、全ての児童生徒が安心して学び、意欲的に取り組む授業づくりも重要。

(2) 欠席したい気持ちを減らせる要因と欠席しなかった理由

欠席したい気持ちを減らせる要因（欠席したいと思い欠席した児童生徒）（％）

			小学校	中学校	高校
児童生徒調査	欠席したい気持ちを減らせる要因	安心して話せる友達がいる	58.5	55.4	43.4
		安心して話せる担任がいる	33.1	25.0	12.5
		クラスとは違う過ごせる場所がある	24.8	26.2	17.1

欠席しなかった理由（欠席したいと思い欠席なかった児童生徒）（％）

			小学校	中学校	高校
児童生徒調査	欠席しなかった理由	学校に行かなければならない	39.5	50.2	56.3
		安心して話せる友達がいる	37.5	33.9	21.2

- ・欠席したい気持ちを減らせる要因は、全校種で安心できる友達がいることの割合が高い。
- ・中学校では「安心して話せる担任」、中学校では「クラスとは違う過ごせる場所」が高い。
- ・欠席したいと思っても欠席しない理由は「学校に行かなければならない」「友達の存在」が高い。

⇒担任の存在も重要。教員の生徒指導や教育相談の資質・能力向上が求められる。

⇒子どもたちにとって友達の存在は大きい。クラスの雰囲気も大切。

(3) 学校生活で安心できると感じる状況

学校生活で安心できると感じる状況 (%)

		小学校			中学校			高校		
		欠席あり	欠席意向があるが欠席なし	欠席意向なし	欠席あり	欠席意向があるが欠席なし	欠席意向なし	欠席あり	欠席意向があるが欠席なし	欠席意向なし
児童生徒調査	教科の授業	26.7	30.8	48.0	16.2	19.8	36.7	12.5	14.2	25.2
	休み時間・放課後	67.3	66.6	75.5	59.4	61.8	75.2	50.7	52.7	63.7
	体育的行事	25.7	28.9	43.1	21.7	28.2	46.5	17.8	19.2	32.7
	部活動等	35.7	34.7	49.9	27.8	35.8	53.5	20.3	24.8	36.6
	友達	54.1	64.2	76.2	58.1	66.1	77.3	46.7	51.3	60.4
	担任教員	33.3	33.1	52.6	22.4	24.1	43.9	14.1	14.7	26.1

- ・欠席意向なしの児童生徒は、欠席意向のある児童生徒比べて、すべての状況で安心できると感じている割合が高い。
- ・全校種で「休み時間や放課後の場面」「安心して話せる友達がいること」の割合が高い。
- ・欠席傾向別による差は、小学校では「担任教員」「教科の授業」、中学校では「担任教員」「体育的行事」「部活動等」、高校では「体育的行事」で大きい。

⇒学校生活における安心感が大切。

⇒特に、教員との関わりや授業など、教育活動中の安心感が欠席状況に影響をあたえている可能性が高い。

(4) 中学校生活に対する気持ち

中学校生活に対する気持ち（小学6年生のみ回答） (%)

		まったく心配ない	どちらかという心配ない	どちらかという心配	とても心配	無回答
児童生徒調査	上級生との関わり	32.8	24.4	27.0	13.6	2.3
	新しい教員	34.2	24.6	25.1	13.5	2.6
	勉強	20.0	23.0	31.1	23.5	2.4

- ・「勉強」に関して心配している割合が最も高く、次いで「上級生との関わり」「新しい教員との出会い」が高い。

⇒勉強や目上の人との関わりに不安を抱えている児童が多い。

2-4-2 初期対応

(1) 相談状況、欠席のきっかけ

相談に関すること（欠席したいと思い、実際に欠席したことがある児童生徒）（％）

		小学校	中学校	高校
児童生徒調査	欠席したいと思った時、誰にも相談しなかった	36.2	45.1	48.4
	相談した相手	家族	89.7	88.4
		担任	25.4	27.2
		友人	24.8	33.5
	相談しなかった理由	相手の反応が不安	40.0	35.7
		相手に迷惑をかけると思った	40.0	36.4
		どう話したら良いかわからない	41.1	37.3

欠席のきっかけと身体の不調の相関（児童生徒調査は、欠席したいと思ったきっかけ）（％）

			小学校	中学校	高校	特別支援学校
児童生徒調査	身体の不調	欠席意向あるが欠席なし	12.9	14.8	15.9	
		欠席あり	27.1	34.9	33.9	
保護者調査	身体の不調	欠席1か月未満	40.9	40.0	44.8	38.3
		欠席1か月以上	31.1	35.4	41.6	33.3

- ・誰にも相談しなかった児童生徒が3割から5割弱。相手の反応が不安等の理由が多い。
- ・相談相手のほとんどは家族で、担任、友人も多い。
- ・欠席のきっかけが「身体の不調」であることについて、児童生徒調査では、欠席意向あるが欠席なしの生徒より、欠席ありの児童生徒の方が高く、保護者調査では、欠席期間が1か月以上より1か月未満の方が高い。
- ・保護者は、初期段階で身体的不調を認識している可能性がある。

⇒誰にも相談しなかった児童生徒が多い。相談相手は家族や担任、友人など、身近な人。

⇒児童生徒が欠席したいと思ったとき実際に欠席するきっかけに「身体の不調」がある。

(2) 児童生徒が相談しやすい環境づくりに関する課題

児童生徒が相談しやすい環境づくりに関する課題（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
教員調査	教職員が多忙	49.3	50.2	50.8	39.1
	教職員の相談スキル不十分	22.4	24.9	27.6	23.4
	相談場所や部屋がない	24.7	21.8	20.5	32.8

- ・全校種で「教職員が多忙」が4～5割程度、「相談スキルが不十分」「相談場所や部屋が少ない」が2～3割程度いる。

⇒児童生徒と向き合う時間や場所の確保、相談スキルの向上に課題を感じている。

2-4-3 不登校児童生徒への支援

(1) 支援機関の利用状況

支援機関等を利用した割合（％）（ ）は利用して「よかった」又は「どちらかといえばよかった」割合の計（欠席日数の合計が1か月以上のみ）

		利用者	小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者調査	自宅のみ	児童生徒	40.2 (-)	49.5 (-)	56.9 (-)	37.0 (-)
	校内の別室等	児童生徒	27.3 (72.2)	33.3 (71.1)	17.4 (74.6)	7.4 (100.0)
	市町教育支援センター	児童生徒	50.8 (77.6)	44.3 (86.0)	14.8 (64.9)	3.7 (0.0)
	フリースクール等	児童生徒	37.1 (93.9)	20.3 (94.9)	2.3 (100.0)	11.1 (66.7)
	スクールカウンセラー	児童生徒	37.9 (60.0)	42.6 (71.8)	44.2 (64.1)	11.1 (66.7)
		保護者	68.9 (56.0)	62.5 (71.4)	40.5 (71.2)	25.9 (71.4)
	スクールソーシャルワーカー	児童生徒	5.3 (100.0)	8.6 (80.0)	4.2 (75.0)	3.7 (0.0)
		保護者	11.4 (93.3)	12.4 (86.1)	4.7 (94.4)	3.7 (100.0)

利用しなかった理由（欠席日数の合計が1か月以上のみ）（％）

			小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者調査	別室	利用できることを知らなかった	9.1	11.3	22.6	25.9
		知っていたが利用しなかった	15.2	36.1	20.8	18.5
		必要性を感じなかった	55.0	30.5	52.5	60.0
		子どもが家から出られなかった	55.0	34.3	38.8	20.0
	教育支援センター	利用できることを知らなかった	12.9	18.2	51.7	48.1
		知っていたが利用しなかった	36.4	35.7	31.9	48.1
		必要性を感じなかった	47.9	46.2	46.3	15.4
		子どもが家から出られなかった	25.0	26.9	23.6	23.1
	フリースクール等	利用できることを知らなかった	8.3	13.4	50.9	51.9
		知っていたが利用しなかった	53.8	64.9	43.6	29.6
		必要性を感じなかった	38.0	37.6	43.5	25.0
		子どもが家から出られなかった	25.4	23.8	26.2	62.5

- ・支援機関を利用せず、「自宅のみ」で過ごしていた児童生徒は4～5割程度で、学校段階が上がるにつれ割合が高い。
- ・支援機関利用者の6割以上が「よかった」「どちらかといえばよかった」と回答しており満足度が高い。
- ・利用しない理由は、「必要性を感じなかった」「子どもが家から出られない」「利用できることを知らなかった」の割合が高い。

⇒支援機関の存在や有効性があまり知られていない。

⇒家から出られない児童生徒への支援方法を考える必要がある。

(2) 民間の支援機関や福祉の関係機関との連携に関する課題

民間の支援機関や福祉の関係機関との連携に関する課題 (%)

			小学校	中学校	高校	特別支援 学校
教 員 調 査	関係機関ごとの機能の違いが分 からない	民間	43.0	44.4	52.4	40.6
		福祉	29.4	34.9	36.8	20.3
	関係機関との情報共有等に時間 がかかる	民間	30.4	31.0	31.9	26.6
		福祉	31.9	37.2	41.6	28.1
	関係機関を保護者にどのように 紹介したらよいか分からない	民間	34.2	36.0	37.3	32.8
		福祉	31.2	30.3	29.7	26.6
	関係機関における個々の児童生 徒の学習状況を踏まえた出席扱 いの判断が難しい	民間	28.3	41.8	40.5	28.1
		福祉	15.7	25.3	29.2	18.8

- ・「関係機関ごとの機能の違いが分からない」については、民間が4～5割程度、福祉が3割程度
- ・「関係機関との情報共有等に時間がかかる」は3～4割程度、「保護者にどのように紹介したらよいか分からない」が3割程度いる。
- ・「出席扱いの判断」については、民間、福祉とも中高が他校種に比べ高い。

⇒関係機関との連携や、保護者への情報提供、出席認定の判断に課題を感じている。

(3) 教員が不登校（傾向も含む）児童生徒や保護者と直接関わって感じた課題

教員が不登校（傾向も含む）児童生徒や保護者と直接関わって感じた課題（％）

			小学校	中学校	高校	特別支援学校
教員調査	児童生徒	性格や精神状態に応じた接し方や信頼関係の構築	46.3	49.8	53.5	43.8
		登校や別室を促すタイミングや程度の判断	35.9	36.4	29.2	20.3
		校内や教室に入ることを拒む子どもへ促す程度の判断	40.2	40.6	33.5	20.3
		保健室や別室利用の許容の程度の判断	39.8	40.2	39.5	17.2
	保護者	保護者と連絡をとれる時間が合わない	37.9	51.7	49.2	21.9
		家庭訪問の時間が合わない	33.8	54.0	27.6	15.6
		家庭連絡の頻度や方法が適しているか分からない	36.9	32.6	33.0	23.4
		保護者と子どもの支援ニーズが一致せず対応が難しい	36.3	34.1	33.5	34.4
		保護者の理解と協力を得ることが難しい	25.0	25.3	24.9	26.6

- ・児童生徒は、全校種で「接し方や信頼関係の構築」が4～5割程度おり、小中高では「教室等に入ることを拒む子どもへ促す程度の判断」「保健室等利用等の許容の程度の判断」が3～4割程度いる。
- ・保護者は、全校種で「保護者と子どもの希望が一致しておらず対応が難しい」が3割～4割弱、「保護者の理解と協力が得られない」が2割程度おり、中高では「保護者と連絡をとれる時間が合わない」が5割程度と他校種に比べ高い。

⇒医療の知見等も踏まえた児童生徒への対応や、児童生徒の個別状況を踏まえた対応、保護者との信頼関係の構築に課題を感じている。

(4)学校を休んだ時の気持ち

学校を休んだ時の気持ち（「あてはまる」・「どちらかといえばあてはまる」の計）（％）

		小学校	中学校	高校
児童生徒調査	ほっとした・気持ちが楽になった	81.9	79.6	77.7
	自由な時間が増えてうれしかった	72.2	72.6	78.7
	勉強が遅れてしまうので心配だった	60.9	65.5	62.3
	自分がよくないことをしているように感じた	55.6	61.1	57.3
	家族に心配をかけて辛い気持ちだった	46.9	51.9	42.2

・学校を休んだ時の気持ちは、「ほっとした・気持ちが楽になった」「自由な時間が増えてうれしかった」の割合が高い。一方、「勉強が遅れてしまうので心配だった」「自分がよくないことをしているように感じた」と考える児童生徒も多い。

⇒欠席した児童生徒は「ほっとした・気持ちが楽になった」割合が多い一方、自分がよくないことをしているように感じた」と考える児童生徒も多い。

(5)学校を休んでいる間の子どもの様子

学校を休んでいる間の子どもの様子（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者調査	心が安定していた	41.9	27.3	21.5	35.1
	原因がはっきりしない頭痛、腹痛、発熱等の身体の不調があった	32.9	37.9	35.3	11.7
	インターネットやゲームを長時間していた	39.4	50.9	25.8	20.2
	落ち込んだり悩んだりしていた	24.5	38.8	25.5	10.6
	家から出られない、他人との関わりを避ける	29.7	33.0	11.8	12.8

・学校を休んでいる間の子どもの様子は、小学校と特別支援学校では、「心が安定していた」の割合が高い一方、高校では「原因がはっきりしない頭痛、腹痛、発熱等の身体の不調があった」、中学校、高校では「インターネットやゲームを長時間していた」、小学校、中学校では「家から出られない」の割合も高い。

⇒心が安定していた児童生徒が一定数いる一方、身体の不調や気持ちの落ち込み、家から出られない様子も見られる。

(6)子どもが休んでいる間の保護者の気持ち

子どもが学校を休んでいる間の保護者の気持ち（欠席日数の合計が1か月以上のみ）（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者調査	進路や将来が不安	68.9	79.4	79.7	66.7
	勉強の遅れが不安	68.9	69.1	53.5	18.5
	いつ学校に戻れるか不安	57.6	54.3	57.1	40.7
	欠席連絡が負担	66.7	68.4	59.0	33.3

- ・子どもが休んでいる間の保護者の気持ちでは、全校種で「進路や将来が不安」が最も高い。
- ・小・中・高校では、「勉強の遅れが不安」「学校に戻れるか不安」「欠席連絡が負担」の割合も高い。

⇒保護者は勉強の遅れや進路選択上のリスクを心配している。

(7)保護者の気持ちの回復や安定につながった支援

保護者の気持ちの回復や安定につながった支援（欠席日数の合計が1か月以上のみ）（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者調査	家族の理解や協力	45.5	36.1	28.3	29.6
	教員との電話相談や面談	25.0	27.1	35.6	25.9
	スクールカウンセラーへの相談	18.2	18.2	14.5	11.1
	スクールソーシャルワーカーへの相談	7.6	5.5	0.5	3.7
	教育支援センターでの相談	15.9	21.3	4.7	3.7
	フリースクール職員への相談	26.5	14.8	2.9	4.3
	不登校の親の会での相談	28.0	21.3	5.5	3.7
	医療機関への相談	34.8	27.5	27.5	40.7
	出欠連絡の方法等についての学校との相談	31.1	26.8	10.4	3.7

- ・「教員への電話相談」が2～3割程度。「出欠連絡の方法等についての学校との相談」は小中学校で2～3割程度。
- ・「家族の理解」「親の会、フリースクール、医療機関への相談」は小学校では高いが、学校段階が上がると割合が低い。

⇒学校や教員がニーズに応じた支援を行うことで保護者の気持ちの回復や安定につながる。

⇒学校外の支援団体等に保護者をつなげる必要がある。

(8)不登校の子どもや保護者への支援の充実に向けて、今後必要だと思う取組

不登校の子どもや保護者への支援の充実に向けて、今後必要だと思う取組（欠席日数の合計が1か月以上のみ）（％）

		小学校	中学校	高校	特別支援学校
保護者調査	相談窓口の充実	53.0	46.0	32.2	48.1
	教員向け研修の充実	72.0	57.4	34.8	40.7
	外出できない子への公的支援	65.2	53.6	39.0	40.7
	授業のオンライン視聴	54.5	55.3	61.0	29.6
	経済的な支援	66.7	45.0	19.7	44.4

- ・今後必要だと思う取組では、「教員向け研修の充実」「外出できない子への公的支援」「授業のオンライン視聴」の割合が高い。
- ・小・中・特別支援学校では、「相談窓口の充実」「経済的な支援」の割合も高い。

⇒保護者への支援に向けた教員の資質向上、相談窓口の充実、経済的な支援を求めている。